

文献学者オスカー・ワイルド

田中 裕介

1 はじめに——ワイルドと言語意識の問題

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の諸作品が、あたかもポストモダン思想に基づいて書かれているかのようにそれと深く交錯していることについては、これまで繰り返し言及されてきた。その最大の焦点の一つが言語意識である。この作家は、言語という記号をあたかもシニフィアンとシニフィエの恣意的な結合として捉えて、浮遊するシニフィアンが社会において機能する様態を描きつくしたように見える。その言語意識がもっとも尖鋭に露呈した作品は戯曲『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1899) であろう。ジャックの身元に関する奇想天外な説明、バンベリーという架空の人物の創造と抹殺、そして女性たちのアーネストという名への奇妙な固執……。いずれも実体なるものへの疑念を基盤とするポストモダンの言語思想を参照枠とすればきれいに解き明かされるように思われる。しかし、そのような認識がなぜワイルドに可能だったのか。

この問題については、主に二つの視角から扱われてきたと考えられる。一つは社会背景を重視した説明である。すなわち商品があたかもシニフィアンのように浮遊する世紀末の消費社会において金銭を稼ぐことが必須だったこの作家の作品には、実体を欠いた関係性によって特徴づけられる市場社会の論理が、必然的に濃密に浸透しているという見方である。レジーニア・ガニャーの『市場の牧歌』に代表される業績が示すこうした見解は、経済学と美学の思想的共通性を土台としており刺激的であることは間違いないが、この枠組みにおいて彼の言語能力を社会状況から自立した分析の

対象とすることは難しい。

ワイルドにおける言語の問題を、言語感覚の自然な発展という性質に還元せず、後天的に習得された側面において検証する場合、別の視点が浮上する。近年の研究では、ジャイルス・ホワイトリー『オスカー・ワイルドとシミュラクル』に見られるように、彼の西洋の古典哲学への親炙を強調する見解である。ワイルドもまたポストモダンの思想家たちと同様に、古典哲学のテキストを読み込むことで西洋近代思想を超える発想を練り上げたという説明は成立するだろう。しかしこの観点に従えば、ワイルドと古典テキストの関係に解釈の基盤をおくことになり、そこに歴史的な文脈が介入する余地は限定されてしまう。本論文では、ワイルドにおける言語能力の自律的な展開という枠組みに依拠しつつ、その展開について主に批評テキストに即して歴史的な検証を行いたい。その作業は、彼の言語意識が同時代の文献学の知見と寄り添いつつ形成された経緯に対する考察を伴うことになる。

2 「歴史批評」と「芸術家としての批評家」における科学的方法論

ワイルド批評の代表作としてともに『インテンションズ』(*Intentions*, 1891) に収録されている「芸術家としての批評家」(‘The Critic as Artist,’ 雑誌初出時は「批評の真の機能と価値」‘The True Function and Value of Criticism,’ 1890) と「嘘の衰退」(‘The Decay of Lying,’ 1889) の論旨は、矛盾しているようにも思われる。前者では科学的方法論に基づいた「批評」が芸術創造において不可欠の役割を果たすと論じられる一方で、後者ではリアリズムと自然主義に対して「ロマンス」を産み出す「嘘」の文学的効用が強調されている。近代的な「批評」と中世的な「ロマンス」、まったく異種の文学形式が各々の論文において顕揚されているかのようだ。本稿はまずこの二つの批評文の淵源に位置する、一八七九年に執筆されたとされる最初期のエッセイ「歴史批評」(‘Historical Criticism’) を光源として、両者の背後に一貫して存在する歴史的な文脈を照射することを試みる。

「歴史批評」と「嘘の衰退」を並べて読むならば、両者の懸隔は明瞭である。確かに「歴史批評」において、一部の記述で、神話形成に資する「想像力」が称揚されている。しかしながらこの論文の主眼は、あくまでも合理主

義的な学問基盤に即した歴史批評の誕生までの過程を古代ギリシャにおいて再構築する点にある。初期の科学的方法論への素朴な信頼がやがて懐疑の対象になり、「嘘の衰退」における「ロマンス」礼賛に帰結したということだろうか。しかし、「嘘の衰退」よりも発表時期が後になる「芸術家としての批評家」は、むしろ「歴史批評」の自然な延長線上に書かれたと判断されるのである。

むろんこの二つのエッセイをつなぐキーワードは「批評」であるが、その「批評」はともにあくまでも合理性に貫かれた科学的基盤に根ざしたものだ。

This [Polybius's] recognition of the importance of single facts, not in themselves but because of the spirit they represent is extremely scientific. For we know that just as from the single bone, or tooth even, the anatomist can recreate entirely the skeleton of the primaeval horse, and the botanist tell the character of the flora and fauna of a district from a single specimen. (Wilde, *The Complete Works IV*, 'Historical Criticism' 52)

[下線による強調はすべて引用者による、以下同じ]

以上の「歴史批評」からの引用においては、些少の「断片」から「全体」を構築するというポリビュオスの歴史的方法論が、解剖学者と植物学者の科学的方法論と類比されている。同じく recreate という語が使われている以下の「芸術家としての批評家」からの引用においては、「批評」が主語となっているが、「断片」からの「全体」の再構築というまったく同種の科学的方法論が語られている。

Nay more, where there is no record, and history is either lost, or was never written, Criticism can recreate the past for us from the very smallest fragment of language or art, just as surely as the man of science can from some tiny bone, or the mere impress of a foot upon a rock, recreate for us the winged dragon or Titan lizard that once made the earth shake beneath its tread, can call Behemoth out of his cave, and make Leviathan swim once

more across the startled sea. Prehistoric history belongs to the philological and archaeological critic. (Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Critic as Artist' 201)

「芸術家としての批評家」というテキストは、同時代の諸種の学問的文献からの自在な暗黙の引用によって構成されている。上の引用においては、この「批評」が「文献学的批評」として捉え直されている点だけでなく、科学的方法論に基づく古生物の再創造が、「文献学」と「考古学」に重ねられている点にも注目したい。ジリアン・ピアによれば、ヴィクトリア時代において「生物学」と「文献学」は、その方法論の展開において相互依存関係にあった。圧倒的な影響力をもったチャールズ・ダーウィン『種の起源』(Charles Darwin, *On the Origin of Species*, 1859) の記述法に「文献学」が依拠しているという論点が従来の研究で強調されていたのに対して、ピアはむしろダーウィンが文献学の方法論を貪欲に摂取して生物世界の体系的理論化を確かなものにしていったと論じている (Beer 97)。

3 ワイルドとミュラー

『人間の由来』においてダーウィンが繰り返し参照していたのが、同時代の比較文献学の泰斗、マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 1823-1900) の著作である (Beer 99)。1823年にドイツのゲッサウで生まれたミュラーは、ライプツィヒ大学、ベルリン大学で学び、次第にサンスクリット文献学者として頭角を現すと、1848年に駐英大使クリスティアン・フォン・ブンゼンによってイギリスに招かれ、1850年にオックスフォード大学に着任する。そして1875年に退任するまで、比較文献学を中心にインド学、東洋学、宗教学、仏教学などを幅広く講じていた。オックスフォード在学時代のワイルドへの知的刺激については、ラスキン、ペイター、J・A・シモンズの名前を挙げるのが通例だが、リチャード・エルマンの伝記には登場しないミュラーとワイルドの学問的関係について言及しているのは、『オックスフォード・ノートブック』のスミス&ヘルファンドである。彼らによれば、1874年にオックスフォード大学に入学したワイルドは大学一年目にミュラーの講義に列席し面識を得て、ワイルドの母親によれば、「ミュ

ラーがワイルドを気に入った」とのことである (Smith & Helfand 9)¹。この証言からも、ダブリン時代に、アイルランド民俗学者の顔をもっていた父親から、さらに古典学者ジョン・マハフィーから薫陶を受けて古典語を身に付けていたのみならず文献学の方法論に触れていたワイルドが、ミュラーの所説を知的に吸収する素地をすでに有していた事実が浮かび上がる。「歴史批評」には一箇所だけ、ミュラーの名前が書き込まれている。

Philology also which in the hands of modern investigators has proved such a splendid instrument of research, was in ancient days studied on too unscientific principles to be of much use. . . . In the *Bacchae* of Euripides there is an extremely interesting passage in which the immoral stories of the Greek mythology are accounted for on the principle of that misunderstanding of words and metaphors to which modern science has given the name of a disease of language.

In answer to the impious rationalism of Pentheus—a sort of modern Philistine—Teiresias, who may be termed the Max Müller of the Theban cycle, points out that the story of Dionysus being inclosed in Zeus' thigh really arose from the linguistic confusion between $\mu\eta\rho\acute{o}\varsigma$ and $\delta\mu\eta\rho\acute{o}\varsigma$.

On the whole, however, for I have quoted these two instances only to show the unscientific character of early philology[,] we may say that this important instrument in recreating the history of the past was not really used by the ancients as a means of Historical criticism. (Wilde, *The Complete Works IV*, 'Historical Criticism' 22-23)

上の引用でワイルドは、明らかに近代科学の方法論に基づくミュラーの学問的業績を十全に理解した上で、古代の「文献学」の非科学的な歴史記述を裁いている。ここでミュラーが神話における事実記述の誤謬を現代科学の立場から糾弾する際に用いた「言語の病」という語句も併せて使用していることが注目される。

『インテンションズ』に収録された後年の「仮面の真実」('Truth of Masks,' 雑誌初出時は「シェイクスピアと舞台装置」'Shakespeare and Stage Scenery,'

1885)にも、ミュラーへの言及が見られる。

And indeed archaeology is only really delightful when transfused into some form of art. I have no desire to underrate the services of laborious scholars, but I feel that the use Keats made of Lemprière's Dictionary is of far more value to us than Professor Max Müller's treatment of the same mythology as a disease of language. Better *Endymion* than any theory, however sound, or, as in the present instance, unsound, of an epidemic among adjectives! (Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Truth of Masks' 217)

上の引用においてキーツが利用したとして言及されている「ランプリエールの辞書」とは、1788年にジョン・ランプリエールが独力で編集刊行した『古典籍固有名詞辞典』のこと。ここでワイルドは、神話学の文献を詩作に活用したキーツと、神話を「言語の病」と称したミュラーを対比して前者に高い価値を与えている²。ワイルドにおいてミュラー評価の転換があったということだろうか。この疑問を検証するためには、ワイルドとミュラーを一对一の影響関係において捉えるのではなく、より幅広い世紀末の文献学の文脈のなかに置き直して考察を進めたい。

4 「嘘の衰退」と科学的文献学

ダブリン時代の恩師としてワイルド研究者にもよく知られている古典学者ジョン・ペントランド・マハフィー (John Pentland Mahaffey, 1839-1919) だが、その学問的著作の内容とワイルドのヘレニズムの関係を詳述したのは、イアン・ロス『オスカー・ワイルドと古代ギリシャ』であった³。ロスは「嘘の衰退」の記述に、マハフィーの学問的方法論に対するワイルドの否定を読み取っている。古代ギリシャ人の生活を歴史的に再構築するにあたって、アリストパネスの喜劇といった文学作品を用いることを拒絶するマハフィーの学問的方法論の視野の狭さを、ワイルドが暗に攻撃しているというのがロスの見解である (Ross 29)。ワイルドがすでに1887年の『ペル・メル・ガゼット』にマハフィーの『ギリシャ人の生活と思考』に対する辛辣

な書評を(無署名で)発表しているかぎり、「嘘の衰退」の論述にマハフィー批判を認めるのは妥当だが、これがもちろん感情的な個人攻撃にとどまるものではなく、学問の方法論に関わるものであった点はロスも強調している。

ワイルドのマハフィー批判の態度を支えた論文としてロスが挙げているのが、『フォートナイトリー・レビュー』1888年1月号に掲載されたロバート・ティレル(Robert Yelverton Tyrrell, 1844-1914)の「古典研究の旧派と新派」である。ワイルドの出身校トリニティ・コレッジのチューターを務めていたティレルは、「嘘の衰退」の形式の先駆をなすその対話体のエッセイを通して、当時の古典文献学が文法偏重に傾いている状況に警鐘を鳴らし、「文法」ではなく「文体」によってこそ歴史の問題は解明できるという意見を示した。

ティレルのこの論争的な対話体の論文において、文法偏重の学者として標的となったのは、アッシリア文献学者として当時名高かったヘンリー・アーチボルド・セイス(Henry Archibald Sayce, 1845-1933)である。マックス・ミュラーの高弟であったセイスは、ワイルドの入学時点で、すでにオックスフォードの研究者として活動を開始しており、その名前はエルマンのワイルド伝にも登場する(Elmann 105)。1879年5月28日にワイルドはセイスに手紙を書き、考古学の研究生の地位を得られるように助力してほしいと依頼している。この試みは実現しなかったが、ワイルドの古典文献学研究への意思は持続し、同年1879年に、マハフィー、セイス、J・A・シモンズらとともに、現在も続く「ギリシャ研究推進協会」の創立に関わり、また同じ年に総長賞懸賞論文応募のために「歴史批評」を執筆するのである⁴。

「嘘の衰退」の暗黙の標的が、ロスの挙げるマハフィーである以上に、セイスあるいは彼によって代表される主流の科学的文献学であると考えられる要因の一つに、そのタイトルの選定がある。「衰退」(decay)という語は『近代説教の衰退』(*The Decay of Modern Preaching*, 1882)というマハフィーの著作の題名を踏まえているというのがロスの意見だが(Ross 65-66)、「衰退」は文献学の用語でもあり、『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)初版を参照するならば、文献学用語としての初出とし

て、セイス『比較文献学の原理』(*The Principles of Comparative Philology*, 1874)の一文が例文として引かれている。確かに「発音上の衰退」(phonetic decay)という語句は、セイスの同著において散見される。個別の言語の構成的側面を「衰退」という相の下に分析する立場は、セイスがミュラーから継承した、比較文献学の方法論の根幹に関わる発想がもたらしたものだっ

た。ミュラーは、インド＝ヨーロッパ語という語族に含められる各々の言語の遡源に失われた単一の言語を措定する。各々の言語の各種の構成的要素は、その単一の言語からの変遷、すなわち「衰退」という観点から分析されうるのである。セイスは、ミュラーのこのような理想主義的文献学の思想を前提として、各々の言語の変成を統一的に記述する科学的方法論としての比較文献学の意義を強調した。

Our science, therefore, by comparing the linguistic relics of social change and thought, by classifying sounds, and words, and sentences, by tracing out the history of forms and syntax, and determining the laws which govern speech, will work back to the progressive intelligence that produced them, and will tell us with the certainty of scientific knowledge, better than all the flints of Abbeville or the skulls of Bruniquel, how “man, the speaker,” first raised himself above the level of the brute, how society progressed from an hivelike communism to the republics of Greece and the kingdoms of modern Europe, and how the fairy world of mythology, the instincts of an unrevealed religion, the philosophic systems of East and West, have grown out of the manifold imaginings of the mind as it struggled to express itself in language. To understand the present, and to provide for the future, we must know the past; and the key to this is given us by scientific philology. (Sayce viii-ix)

セイスの提起する「科学的文献学」の学問的枠組みにおいて、いっさいの言語テキストは、音と語と文の要素に解体されて分類の対象となるとともに、単に言語の発展だけではなく人間社会の進歩を再構成する史料として

扱われる。当然ながら、そこに言語芸術としての文学作品のために特別な場所が与えられることはない。もちろんこれはセイスのみの観点でなく、例えば1857年に編纂作業が始まり、1884年に分冊の刊行が開始される『オックスフォード英語辞典』の文献学的処理において、文学テキストも語の歴史の展開を記述するための史料の一部を構成するに過ぎないのである。

ワイルドの「嘘の衰退」は、文学におけるリアリズムの手法を貶め、想像力を駆使した「嘘」としてのフィクションを評価するという論旨において、文学テキストを歴史の資料から排除したマハフィーの考古学的方法論よりもむしろ、文学テキストを歴史の「真実」を構成するための史料として等し並に組み込み、その言語芸術としての特性に対する考察を決定的に欠いているセイスの文献学的方法論を強く意識していると考えられる。ただし「嘘の衰退」という文献学論文のパロディのようなタイトルが示唆するとおり、ここでワイルドは文献学という学問を正面から批判する態度をとっているとは言い難い。あくまでもセイスによって代表される科学的研究者が示す枠組みに、文学作品において駆使される言語使用の様態が解消しえないという論点をひそかに掲げることで、文献学的方法論的死角を突くことを暗に意図していたと言った方がよいだろう。ただし「嘘の衰退」執筆過程で向かい合った、言語を歴史記述のための「証拠」に還元する文献学的認識は、ワイルドに棘のように突き刺さったはずである。この「証拠」としての言語という観念への反発が、彼をミュラーとの対決の方に導いたのではないかと推定される。

5 「芸術家としての批評家」——ミュラー言語学への挑戦

「発音上の衰退」という言語的現象の提起者であった、セイスとワイルドの共通の師ともいえるミュラーの文献学に対して、ワイルドはどのような立場をとったのだろうか。「芸術家としての批評家」は、「嘘の衰退」においてセイスの科学的文献学的方法論を暗に標的としたと捉えられるワイルドが、かつて強烈な知的刺激を受けた学問の巨人マックス・ミュラーの文献学に対して、その影響を肯定しつつ乗り越えを図った両面的な文書として考えることができる。まずはワイルドがミュラーの提示するどのような論点をもっとも大きく念頭に置いていたのかを、その主著『言語学講義』

(*Lectures on the Science of Language*, 1861) の一節を通して検討したい。

But if that change take place, it will not be by the will of any individual, nor by the mutual agreement of any large number of men, but rather in spite of the exertions of grammarians and academies. And here you perceive the first difference between history and growth. An emperor may change the laws of society, the forms of religion, the rules of art: it is in the power of one generation, or even of one individual, to raise an art to the highest pitch of perfection, while the next may allow it to lapse, till a new genius takes it up again with renewed ardour. (Müller 38-39)

上の引用において、ミュラーは、学問の対象に関して、人為によって改変可能な「歴史」と自然の力による変成としての「成長」の区別をつけている。言語の変成現象は、歴史的現象とは異なって、個人の人為的な意思が介入する余地がないため、普遍的な理論によって解明されるべきものとされる。自然科学としての「比較文献学」は、この普遍的な理論を提示する役割を担うのである。問題となるのは、芸術と文学の位置づけである。

In all this we have to deal with the acts of individuals, and we therefore move on historical ground. If we compare the creations of Michael Angelo or Raphael with the statues and frescos of ancient Rome, we can speak of a history of art. We can connect two periods separated by thousands of years through works of those who handed on the traditions of art from century to century; but we shall never meet with that continuous and unconscious growth which connects the language of Plautus with that of Dante. (Müller 39)

上の引用で、ミュラーは「芸術」(ミケランジェロとラファエロの名前を挙げることで絵画と彫刻を想定していることが理解できる)を歴史科学の対象に含めている。言語芸術としての文学の位置については、「プラウトゥスの言語をダンテの言語につなぐ持続的な無意識の成長について私たちが

対応することはない」と述べて、文学を「芸術」から除き歴史科学の対象から除外する一方で、「自然科学」としての比較文学の対象として言語の内部でその特性について記述することをも拒絶する。すなわちミュラーの比較文学の枠組みにおいて、芸術家という個人が創造する文学作品は、「言語の病」として処理され、その言語の一般的变化に与える影響については基本的に否定されるのである。

すでに文学言語の機能を考慮する余地なく確立された科学としての文学の方法論を掲げるセイスに対しては、外部からその盲点を突くという以上の介入はできなかつた一方で、文学言語の自律的な展開を認識しつつも否定的に切り捨てるミュラーの記述には、言語芸術としての文学の特性を強調するという立場に依拠して正面から取り組む可能性を許容するようにワイルドには思われたのではないか。そのかつて甚大な影響を受けたミュラーの言語観への挑戦の試みが結実したのが「芸術家としての批評家」であった。この批評文において展開される不連続的とも見える多種多様な主張は、ミュラーの文学学の方法という学問的内容を共通の文脈として前提としている。

まずワイルドは、この対話体の批評において自己の芸術観の代弁者としてのギルバートの発言を通して、ギリシャ人を「芸術批評家の国民」と規定し、彼らは「言語の批評」を洗練させたと述べてホメロスの例を挙げている(Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Critic as Artist' 137-38)。「言語の批評」の主たる対象に言語芸術としての文学を据えるという立論は、ミュラーの文学学の方法へのアンチテーゼと解釈することができる。次いで浮上するのは、「われわれが歴史に負っているのは歴史を書き換えることだ」(Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Critic as Artist' 147)というギルバートの言葉が示すように、歴史記述の問題である。行動を起こして歴史を作るのは誰でもできるが、思考から生まれた子供でなく、思考を生み出す親である言語を駆使して歴史を記述することは、芸術の媒体としての言語に通曉した人間でなければなし得ない。ワイルドにおいて歴史記述は、単一の意味に固定された科学的論述に収束する、事実という証拠の集積ではなく、言語の精妙な機能を十全に活用して絶えざる重ね書きを通して形成されるテキストであるという点で、芸術批評と連続的に捉えられるべき作品

であった。ミュラーからセイスを含む次世代の文献学者たちへと継承された、歴史記述の「証拠」としての言語という観念に反対して、いわば重層的なテキストとしての言語という認識を提示しているのである。

言語芸術としての文学を対象とする「審美的批評家」の役割がもっとも凝縮して表現されているのは、二部構成をなすこのテキストの第一部の末尾に当たる箇所である。

You see, then, how it is that the aesthetic critic rejects these obvious modes of art that have but one message to deliver, and having delivered it become dumb and sterile, and seeks rather for such modes as suggest reverie and mood, and by their imaginative beauty make all interpretations true, and no interpretation final. (Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Critic as Artist' 161)

上の引用に見られる、芸術作品が単一の意味しか持たないというあり方を「審美的批評家」が拒絶するという記述において否定的に想定されているのは、言語を単一の意味に固定し、複数の解釈を許容しない科学的文献学である。続けてワイルドは、「批評家の創作」について言及する。

Some resemblance, no doubt, the creative work of the critic will have to the work that has stirred him to creation, but it will be such resemblance as exists, not between Nature and the mirror that the painter of landscape or figure may be supposed to hold up to her, but between Nature and the work of the decorative artist. . . [S]o the critic reproduces the work that he criticises in a mode that is never imitative, and part of whose charm may really consist in the rejection of resemblance, and shows us in this way not merely the meaning but also the mystery of Beauty, and, by transforming each art into literature, solves once for all the problem of Art's unity. (Wilde, *The Complete Works IV*, 'The Critic as Artist' 161)

「審美的批評家」は、単に対象を透明に再現するのではなく、自然と装飾

デザインの関係と同じように、「美の神秘」を開示するようなやり方で、対象となる芸術作品を「文学」に変容させることを通して、芸術の再生産を主体的に行う存在として定義されている⁵。「審美的批評家」を、意味の多様性を潜在させている芸術作品を、その多様性を顕す言語によって構成されるもう一つの芸術作品を生み出す存在としてワイルドは把握する。その把握において、多層的な文学テクストを一義的な証拠として扱うことでその意味を確定し、その集積によって単一の歴史を構想する文献学的批評の方法論が、対照的な性質を有するものとして否定的に前提とされているのである。

ワイルドは果たしてミュラーその人を仮想敵として見なしているのだろうか。ここで想起しなければならないのは、すでに本稿において引用した「芸術家としての批評家」の一節において、「文献学的批評」の科学的方法論が肯定的に言及されているという事実である。これは単純な矛盾ではなく、ワイルドのミュラー言語学的方法論への態度という観点から一貫して説明することは可能である。ワイルドは、言語芸術としての文学を中心に据える「審美的批評」によって、ミュラーの科学的な文献学的批評における欠落を補い、それを包摂しつつより言語の多層的な性質に即した別の新しい文献学への試みを「芸術家としての批評家」において遂行しているのだと考えたい。上の引用の末尾にある言語の自律的な「統一性」の感覚がかつて強烈に刷り込まれたのは、個人的な親交が深かったマハフィーではなくミュラーの学問によってであったという事実は、ワイルドにとっては重いものであったはずである。

この批評文が収録された書物が「インテンションズ」と題された意味についても考察しておきたい。私見ではこの「意図」と訳される語もミュラー言語学からの引用なのである。“Dialectic growth again is still more beyond the control of individuals. For although a poet may knowingly and intentionally invent a new word, its acceptance depends on circumstances which defy individual interference” (Müller 63). この引用では、詩人が新語を作ったところでそのような「個人」の介入は、総体的な言語の発展史を直接左右するものではないという文脈で、intentionally という副詞がその詩人の言語創作の行為を修飾している。一つには、ワイルドはこの題名の選択によっ

て、ミュラーに逆らって、文学者という「個人」による、創作行為を通じての言語の歴史への積極的な寄与を主張していると捉えられる。また次のような用法もある。“Here, too, Grimm’s Law does not apply, for both words were intended to convey merely the cackling sound of the bird; and, as this intention continued to be felt, phonetic change was less likely to set in” (Müller 348). ここではある擬音語の発生の際の原初の「意図」として intention という名詞が用いられている。ワイルドはこの用法を踏まえて個人の意思の有無を問わない「意図」の意味を導入しつつ、その複数形の使用によって、語義を単一の意味に還元する学問的処理に異議を唱えていると解釈することができる。言語テキストは、複数の「意図」が交錯することで織り成される重層的な文化的構築物なのである。

6 おわりに — 「W・H氏の肖像」と『真面目が肝心』における言語実践

「芸術家としての批評家」が、ワイルドが構想する審美的な文献学的批評の理論的スケッチであったとすれば、その実践の試みは彼の諸種のフィクションに認めることができよう。「W・H氏の肖像」(“The Portrait of Mr. W. H.,” 1889)においては、シェイクスピアのソネットの徹底的なテキスト読解の結果、作者が創作の際に想定していた美少年俳優ウィリー・ヒューズの像が浮上するのだが、その存在を実証的に支える「証拠」がないという問題がこの物語設定の核心をなしている。科学的な批評の作法に従えば、少年の存在を一義的に伝える外在的な証拠がなければ、ウィリー・ヒューズ説は成り立たない。そこでこの説の主唱者は、その姿をそのソネットの書物とともに描き出した肖像画という証拠を捏造するのである。この魅惑的な解釈をめぐる批評の物語においては、「証拠」が絵画という特定の芸術ジャンルに属していることの意味はおそらく薄い。むしろ文学作品という言語テキストの精読から得られた全体的な解釈(ワイルドはこれにネオプラトニズムの意味を付与する)に、偽造された証拠が伝える単一の意味が対置されていることに本作の意義がある。「W・H氏の肖像」は、科学的な意味づけの枠組みに収まらない、言語テキストの重層的な読解から得られる解釈を遂行する批評の形式を提示している点で、このすぐ後に書かれ

た「芸術家としての批評家」の内容に直結する。

ミュラーの文献学的批評との格闘を通じて練磨されたワイルドの言語意識が、具体的な文学テキストとしてもっとも華麗に開花したのは、その演劇作品である。それらの戯曲が風習喜劇の伝統的形式を踏まえつつも、ワイルドにしか書くことのできない特異な芸術作品として結晶しえたのは、そこに審美的な文献学的批評に基づく言語認識が流露しているからである。それがとりわけ顕著であるのは、最後に書かれた戯曲『真面目が肝心』であろう。まずもって、題名と劇作本文における earnest と Ernest という一対の形容詞と固有名詞をめぐっての、音声での一致と書記での不一致という設定からして、言語の学問的把握に関する鋭い意識がうかがえる。

この喜劇を構成するワイルドの言語は、作中のセシリーの日記に記された言語がその様態を凝縮して示すように、何らかの実体を指示する単一の機能による規定を絶えず裏切り、逃れてゆく。現実を反映する「証拠」としての言語使用に関心を限定する科学的言語認識を嘲笑するように、実体から離れて発せられる言語がむしろ現実を作り出していく。この戯曲においては、現実とは無関係に「アーネスト」という名前をもつ男性と結婚するというグウェンドレンの言葉が、結局はその願望が叶えられることで現実になる。その経緯が伝えるように、言語と現実は、順序は逆であってもその対応の関係は保持されている。言語は、現実から遊離するのではなく、現実の創造的構成に寄与するという、現実への新しい対応のための媒体として再生されるのである。その意図にこそ、言語の自律的な秩序によって現実の混沌を圧倒的に統御するかに見えたミュラー言語学の知的体系化の力へのワイルドの最終的には肯定的な態度を読み取りたい。一方、自分には兄弟がないという現実を指し示すアルジャンンの言葉の意図は、最終的に露呈した現実によって覆される。不在の親から生まれた兄弟という血縁関係の回復という物語は、ヴィクトリア時代小説の典型的な枠組みであるとしても、文献学の相の下に読む場合、祖語とその子孫の言語の類縁関係を再現するミュラーの比較文献学の枠組みと奇妙に重なるのである。

* 本稿は、日本ワイルド協会第42回大会（2017年12月2日、慶應義塾大学三田キャン

ンパス)シンポジウム「オスカー・ワイルドの批評と歴史性——「解釈」をめぐる」における発表「文献学者オスカー・ワイルド」の原稿に大幅な削除、付加、整理を施したものである。

注

- 1 モンゴメリー・ハイドの伝記では、ミュラーの講義にワイルドが「強く惹きつけられた」ことが記されている (Hyde 17)。
- 2 ミュラーの言語理論がヴィクトリア時代の文学者に与えた甚大な影響を精査したリンダ・ダウリングは、世紀末に至って彼の声望が凋落した状況に触れて、ワイルドの「仮面の真実」からのこの引用を傍証としている (Dowling 72)。
- 3 ワイルドとマハフィーの関係については近年研究が進んでいる。Alastair J. L. Blanshard は論文 'Mahaffy and Wilde: A Study in Provocation' において、両者の不和の原因を、ギリシャ同性愛に関する見解、宗教観、社会観の異なりといった多角的な観点から検証している (Riley, Blanshard and Manny 19-35)。
- 4 「歴史批評」の成立事情については、Smith II の序論 (xv-xxxiv) および Wilde, *The Complete Works, IV* の編者 Guy による序論 (xix-xxviii) を参照。
- 5 この点において、文献学的学識を踏まえたギリシャ文化の再評価を通して「芸術」の新たな位置づけを模索するという似通った問題意識を抱いていたフリードリヒ・ニーチェとワイルドは、鋭く対立する。『悲劇の誕生』においてニーチェは、「芸術家」を「個人の意味」から解放された「媒体」であり、「真の創造者」の美学的投影として捉えている。一方、ワイルドにとって、「批評」は、ミュラーの提起したような、非人称的かつ普遍的な「文法」に寄与するのではなく、あくまでも個人の主体的な芸術創造に結びつくものでなければならなかった。

References

- Beer, Gillian. *Open Fields: Science in Cultural Encounter*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Dowling, Linda. *Language and Decadence in the Victorian Fin de Siècle*. Princeton: Princeton UP, 1986.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. New York: Vintage, 1988.
- Gagnier, Regenia A. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford: Stanford UP, 1986.
- Hyde, H. Montgomery. *Oscar Wilde*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1975.
- Mahaffy, J. P. *Social Life in Greece from Homer to Menander*. London: Macmillan, 1874.
- Müller, Max. *Lectures on the Science of Language*. London: Longman, 1861.
- Nietzsche, Friedrich. *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe, Band I*. München: DTV de Gruyter, 1980.

- Riley, Kathleen, Alastair J. L. Blanshard and Iarla Manny, eds. *Oscar Wilde and Classical Antiquity*. Oxford: Oxford UP, 2017.
- Ross, Iain. *Oscar Wilde and Ancient Greece*. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- Sayce, Archibald Henry. *The Principles of Comparative Philology*. London: Trübner, 1874.
- Smith, Philip E. and Michael S. Helfand, eds. *Oscar Wilde's Oxford Notebooks: A Portrait of Mind in the Making*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Smith II, Philip E., ed. *Oscar Wilde's Historical Criticism Notebook*. Oxford: Oxford UP, 2016.
- Tyrrell, Robert Yelverton. 'The Old School of Classics and the New: A Dialogue of the Dead,' *Fortnightly Review* 43, Jan(1888): 42-53.
- Whiteley, Giles. *Oscar Wilde and the Simulacrum: The Truth of Masks*. Oxford: Legenda, 2015.
- Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde, Volume IV: Criticism: Historical Criticism, Intentions, The Soul of Man*. ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007.
- . *The Complete Works of Oscar Wilde, Volume VII: Journalism II*. ed. John Stokes and Mark Turner. Oxford: Oxford UP, 2013.
- . *The Complete Works of Oscar Wilde, Volume VIII: The Short Fiction*. ed. Ian Small. Oxford: Oxford UP, 2017.
- . *The Importance of Being Earnest*. ed. Russell Jackson. London: Bloomsbury, 1980.